

次郎長

次郎長翁を知る会
会報 第20号
平成19年3月10日発行
発行所
〒424-0821
静岡市清水区相生町6-17
静岡市観光協会清水支部内
TEL (054) 352-7331
発行人 竹内 宏
字
編集人 田口 英爾
印刷所 (株)ニシガイ
TEL (054) 352-2188

清水に元気を！

目指した「行かざあの会」の一年

NHK木曜時代劇「次郎長背負い富士」の放映で湧いた昨年夏。町おこしをと結成された行かざあの会は、千恵蔵の次郎長名画の上映、初めての次郎長マップ作成、次郎長ウォークなどを実施。「清水に元気を」と打ったイベントを通じ、改めて次郎長の人気の底の深さを痛感させた。この一年をふりかえる。事務局長山田健司の記。

平成十八年は「次郎長で行かざあ」と、次郎長で始まり終った次郎長尽くしの一年だった。

NHKがゴールデンタイムの木曜時代劇で、次郎長のドラマを全国放映することがわかり、これを機に「次郎長をテーマに清水の町おこしを」と、一月四日、田口英爾、望月憲一、天野香、山田健



片岡千恵蔵主演 昭和32年

司の四人が、竹内安会長に相談してゴーサインをいただいたときから始まった。静岡市観光協会清水支部の梅原久義常務も加わって世話人のメンバーが揃った。顔ぶれは、これに相澤誠二、上田紘司、宮城嶋一雄、望月栄次、山本勉、吉井靖の諸氏。前号で紹介した通り多才な人たちで、清水に元気な風を吹き込もうと皆意気に燃えていた。

世話人による準備会を重ねて、五月十六日「次郎長で行かざあの会」設立総会を清水マリニビルで開いた。百三十人もの次郎長ファンが会場いっぱい集って、これからの事業計画が承認されスタートを切った。(前号参照)

六月一日、原作山本一力(直木賞作家)脚本ジェームス三木によるNHK木曜時代劇「次郎長背負い富士」は全十回放送で始まった。次郎長を

中村雅俊、お蝶を田中美里で、人情味あふれた次郎長は時代の寵児のように町のなかで話題になっていった。

なつかしの名画

片岡千恵蔵「任侠清水港」を上映

「次郎長で行かざあの会」は、これに呼応して動きを始めた。まず、ドカンと打ち上げ花火を上げるように宣伝しようと、懐かしい次郎長映画、それに清水在住の演歌歌手稲葉永子さんを加え、映画と実演の集いが開催された。八月十日、会場は桜が岡清水文化会館である。

映画上映はこの地域で長い間自主映画上映運動を続けている清水映画サークル協議会山本隆茂さんの指導と援助を受けて、今から五十年前の次郎長映画「任侠清水港」を上映した。清水の次郎長には片岡千恵蔵、森の石松は中村錦之助という当時の東映のオールキャスト総出演によるもので、昼夜二回の上映で五百名もの人たちが鑑賞した。稲葉永子さんは自分の持ち歌「花の次郎長三人衆」や「森の石松」に、ご存知「旅姿三人男」を歌った。これに色を添えたのが、芸者衆の唄と踊りだ。清水芸者衆が特別に友情出演して「次郎長音頭」や「茶っ切り節」を三味線に併せて踊り花を添え、清水文化会館中ホール、満員の会場を盛り上げてくれた。

八月二十五日、清水駅前銀座商店街との協賛で、野外映画会を開催した。「つっぱり清水港」は二十四年前の中村雅俊の次郎長映画で、次郎長の青春時代を喜劇風に蘇らせてくれた。夏の夜の無料映

画会だったが、あいにくの天候で夕方に雨が降り出し後に雨は上がったが、出足は期待したほどではなかった。

NNKのドラマ「次郎長背負い富士」は八月三十一日で終了した。なお、このドラマの時代考証は田口英爾さんが担当された。

気になる視聴率は、NNKによると静岡で十四%から十七%、東京でも十%ということで、好視聴率が確保できた。テレビドラマでフィクションであったが、視聴率から清水次郎長はいまでも日本人のこころのなかに生きていることが証明された。

史実としてアウトローの次郎長の闘いは荒神山で終った。任侠道も武士道も男の社会だが、共通したものは、意外に思いやりと人間愛と優しさが底辺に流れているように思えた。次郎長は単なる博徒ではない。内輪もめのなかった次郎長一家を率いて、明治になって任侠の世界から脱け出し維新という新しい風のなかで生きていった。いつの世でも多くの人間をまとめ上げていくリーダーは必要だ。次郎長の生き方にはいろいろな見方や評価のしかたがある。幕末から近代化を推し進めた明治時代には、混乱した時代だからこそ次郎長のようなリーダーが必要だった。それは時代の要請だったともいえる。

ドラマでは伏谷如水や山岡鉄舟、そして次郎長の養子となり『東海遊俠伝』を執筆してこれが元になって大衆芸能として次郎長を一躍全国的なヒーローに押し上げた天田愚庵などの人物の登場はなかった。これらのドラマ化は難しいだろうが、

明治の次郎長を取り上げて欲しかった。

NNKのテレビ放映は清水の町に千載一遇のチャンスを与えてくれた。県内外からの観光客が増え、なによりも次郎長を知らない世代に次郎長を浸透させることができた。これが後継者づくりの布石になっていければと願っている。

次郎長マップの作成

かねてから次郎長翁を知る会のなかでの課題となっていた次郎長マップを作成することになった。清水港が生んだ郷土のヒーロー次郎長の足跡を、いままであまり知られていないところまでも網羅したもので、楽しみながら見てもらおうというのがそのねらいであった。さらに海外からの観光客にも分かるように、英語・中国語の説明文も掲載した。マップは二万部作成して、持ちやすいようにポケットに入る大きさにした。市内の観光案内所や主だった観光施設はもちろんのこと東京・名古屋の観光案内所にも無料で配布した。このマップの評価は、見やすく分かりやすく持ちやすいと大変好評で、多くの方々からお褒めをいただいた。清水の三大祭りの一つ、十一月十九日の「おい



べっさん」の日、恵比寿講のイベントには、次郎長通り商店街の援助を受けて次郎長名物店を開いたが、あいにくの雨で客足も伸びず今いちの結果となった。

次郎長ウォーク

十二月二日、次郎長ウォーキングは好天に恵まれて実施された。JR清水駅東口広場には、早朝から大勢の人たちが集ってきた。県内では西は湖西市や浜松市から、東は富士市から参加して、総勢二百五十名もの人たちが広場は埋めつくされた。各人が次郎長マップを持って、一グループ二十名ずつの班をつくり、案内人に誘導されて半日コースを歩いた。各史跡は案内人の説明付きだから、ただ歩くだけではない。途中、船宿記念館「末廣」では次郎長道中保存会の人たちが、余興で蘭切れのよい啖呵をきって楽しませてくれた、最終地は梅蔭寺で自由解散となった。

参加者の感想は今まで以上に次郎長に興味をもったこと、楽しかった、面白かった、知らないことが多くあって勉強になったなどが寄せられた。ウォーキングは事故も無く大成功のうちに終わった。

今年は2007年、徳川家康駿府城入城四百年で、静岡市では記念事業を計画している。清水港は家康以来のおひざ元、さらに次郎長は新門辰五郎と共に、徳川慶喜公の警護役を自任したこともあり、「次郎長で行かざあのかい」の運動はこの四年祭事業と連動していければと希望している。

次郎長を知らない世代に次郎長を知ってもらう

ことや、次郎長そのものの正しい実像を探ること

など、次郎長フォーラムの開催も議題に上ったが、これは残された課題といえよう。また、ウォーキングでわかったことは、次郎長の史跡をあまりにも知らない人が多かったことだ。なかでも壮士の墓を知らない人たちが多いことには驚かされた。これを糧に、「知る会」の方で引き続き次郎長ウォークを、少し実施形態を変えてできればとも考

次郎長ウォークに参加して

天気晴朗なれど風強し……。



えている。

「次郎長で行かざあの会」の運動は、一定の成果を上げることができた。が、しかし、それと同時にいくつかの課題も残した。これらについて今後は世話人会のなかで相談して、次郎長が清水のなかにより確実に深く定着していくようホップ、ステップ、ジャンプしていかねければならない。「次郎長で行かざあの会」事務局長 山田健司

平成十八年十二月二日(土)。きょうは次郎長の史跡をたどる「次郎長ウォーク」の日である。昨夜は大雨が降り心配したが、一夜明け、朝から快晴に恵まれた。

私たちは集合場所のJR清水駅東口のイベント広場で準備を始め、段取りの打ち合わせをしている間にも参加者はどんどん増えてくる。九時に受付を始めたところには、百名ぐらい並んでいる。歩行者の安全と、各所で説明する人の声が聞きやすいようにと、二十名ずつのグループに分け、

九時半、挨拶後に一班からスタートした。グループの先頭に説明する人、プラカードを持つ人の二名がつき、前のグループが出て三分後に次のグループが発進する。私は二班の担当で、港関係に詳しい山梨弘さんと組んだ。

清水テルサの横を通るときは向い風が強く、埋め立てられて出来た道や港の説明も簡単にすませ、旧清水港線跡地の遊歩道に入ると、自転車と歩行者専用になっているので話はずみ、気持ちよくウォーキングを楽しむ。

次郎長ウォーク経路図

JR 清水駅東口スタート

- ①次郎長堤跡
- ②次郎長宅跡碑
- ③船宿記念館「末廣」
- ④壮士の墓
- ⑤妙慶寺
- ⑥次郎長生家
- ⑦甲田屋
- ⑧梅蔭寺

エスパルスドリームプラザ海側に到着し、テルファアの説明から始まり、ヨットハーバーを見ながら、海沿いに木材でつくられた遊歩道を進み、遊覧船乗り場の前に行く。この辺りは参加者も歩いたことがないという人が多く、富士山を見ながら感動していた。ここは、スタートから約二十分、経路図①の目的地である。不自然な形で带状に

伝えたい文化 伝えたい心。



水口屋 みなぐちや

江戸時代には、興津脇本陣として、明治・大正・昭和期には、別荘旅館として全国に名を馳せ、西園寺公望等も愛用した、一碧楼水口屋。鈴与グループでは、約400年続いた宿屋の歴史を後世に伝えるべく、フェルケール博物館に寄贈されていた研究資料を「水口屋ギャラリー」として一般に公開しています。



鈴与株式会社

〒424-8703
静岡県静岡市清水区入船町11-1
TEL.(054)354-3054 www.suzuyo.co.jp

残っている石積みが、次郎長堤跡という。明治の初め、新しい清水港が築造され、石堤の防波堤や船着場をつくられたが、尽力した次郎長の功績をたたえて地元の人々は「次郎長堤」と呼んだ。大部分は近年の埋立工事で失われ、ここにその一部分が残っているわけだ。この界限は山梨さんの専門である。

②次郎長宅跡は、マリンパークの入り口（県所有地）のため少し国道寄りに石碑がある。石碑の揮毫は竹内宏会長によるもので平成十一年建立された。

③船宿記念館末廣は港橋前にある。風で冷えた体は末廣に入り温かくなり心地よい。船宿は明治十九年に建てられ三代目おちようと経営し、次郎長はここで明治二十六年に波乱の生涯を閉じた。



清水港線跡地遊歩道を歩く第二班

この建物は戦災を免れ持ち主も場所も変わったが、保存され、旧清水市が平成十三年解体された材料を使い復元された。入るとすぐ目につく大黒柱などは当時の物を使っており、次郎長や子分も触れていると説明すると、参加者も手を出して触れていた。

④壮士の墓は意外に初めてという参加者が多く、地元の人でもここまで来たことはないという。

港橋を渡り、次郎長通りの⑤妙慶寺門前に行く。初代おちようと新世帯を持ったころの次郎長一家は貧しく、夏の蚊の出るとき蚊帳が一組しかない。公平を保つため、それは使わずに、妙慶寺の杉の葉をとって蚊いぶしにした。杉の木は一夏で丸坊主になったというエピソードで一同大笑いする。

⑥生家は大体の人がよく知っている。

⑦甲田屋跡である。生まれて間もない次郎長は生家の近くの叔父次郎八の営む米穀商甲田屋の後継ぎとして養子になる。姓は山本名は長五郎。次郎八のところの長五郎というので次郎長と呼ばれ、子供のときは梅蔭寺でよく遊び、悪ガキの見本のようなであった。

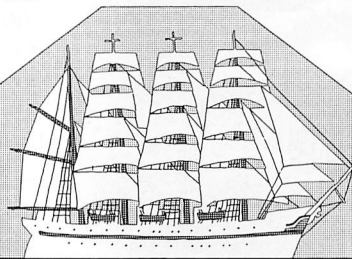
次郎長は天保十三年、二十三歳のとき、バクチ場のもつれから殺傷事件を起し、無宿者となって清水を離れる。このとき次郎長は甲田屋の一切を姉夫婦に譲る。生家からおよそ二十メートル、ほんの目と鼻の先の次郎長通りに面した甲田屋は、現在は化粧品店と家具店になっている。

次は⑧最後の梅蔭寺でゴールイン。参加者は次郎長の墓まで行く人、ここで帰る人ありで参加賞を受取る。初めて歩いた人も多く、皆さん満足し

次郎長の後半生は
地域の発展に捧げられ
ました。



清水銀行も地域の
経済・文化・スポーツの
発展をお手伝いして
まいります。



清水銀行

て別れた。

このウォーキングを実施するに当り、世話人は何度も集まり、次郎長マップも校正に校正を重ね、この日に配布できた。そして一番心配したのは、「何名参加してくれる」だったが、聞けば二百五十名以上も参加したとのことと本当に嬉し

かった。これだけで今までの心配は吹き飛んだ。最後に、ガイドがなくても歩けるよう、各所に説明板とか標識を是非建てたいと思った。これは「行かざあのかい」の課題である。とにかく、初めてのウォーキングの成功に感謝します。
(天野 香)

次郎長の子分たち考

大政から関東綱五郎まで

世に名高い「二十八人衆」は、「東海遊侠伝」に登場する大政、小政、石松などすべて実在の人物だ。ただ一人、「追分の三五郎」は講談・浪花節の産物で、神田伯山が遊侠伝を講談に仕立てる時、都鳥吉兵衛兄弟をやつつけるヒーローとして創作した架空の人物である。

そのほかの子分は、すべて遊侠伝に名前があげられているわけだが、二十八人という数は、遊侠伝の中にはなく、たとえば、黒駒の勝蔵側と天竜川をはさんで対峙する時の、次郎長側の子分の人数は二十四人だ。二十八人というのは、一種の数合わせ、千手観音の眷族で行者を守る二十八善神



大政（山本政五郎）
41歳の写真

を「二十八部衆」というあたりからきている。

ご承知のように「東海遊侠伝」は次郎長伝記の元祖であるが、天田五郎が次郎長の口述でこれを書いた時、次郎長は六十歳に手が届く年齢であった。（父母妹の行方をたずねる天田五郎を、次郎長が自宅に寄留させたのは、明治十一年のことです。東海遊侠伝の草稿は、この時できあがったとされる。）

次郎長が、二十人を超える子分たちの名前を、しかも二十年、三十年前にさかのぼって記憶していたというのは、驚くべきことというほかない。この稿では、名の知られた子分たちの中から、何人かを取りあげてみたい。

大政

次郎長子分の筆頭として知られる。本名原田政五郎、後に次郎長の養子となり、山本政五郎を名乗る。

武士の出身ともいわれるが、愛知県常滑の回船問屋の生れが事実らしい。（勝瀬光安稿）

キチンと！

Hagoromo はごろもフーズ

100g
小分け

食べたい分だけ、
いつでも炊きたて！

パイパッとライス

ホームページアドレス <http://www.hagoromofoods.co.jp/> ※パイパッとは、はごろもフーズ(株)の登録商標です。



梅蔭寺の過去帳には、「明治十四年二月十五日、行年五十歳、大然宣政上座、上町山本政五郎」とある。明治十四年に五十歳ということから数えると、生れたのは天保三年、次郎長のちょうど一回り年下であった。

亡くなった当時の大政は、富士裾野開墾場の監督をつとめ、次郎長と同じ上町に住み、後継者と目されていた。息子の小三郎は明治三十四年没。次女のなほは、静岡市人宿町の旅館伝中屋に嫁した。慶応三年生れ、次郎長五十回忌の昭和十七年には健在で、七十六歳の彼女は次郎長や父大政の回想談を、朝日新聞静岡版にのせている。

ちなみに大政の本姓である原田姓は、田中啓次郎にゆずられた。大政は呼び名のように六尺（メートル八〇）ゆたかの大男で遺品の胴着（梅蔭寺遺物館に展示）がそれを裏付ける。

小政

本名吉川冬吉。浜松出身。明治七年（一八七四）没、行年三十二歳（浜松大聖寺）とあるから、天保十四年生まれか。「清水みなとは鬼よりこわい、大政小政の声がする」と謳われるように気性が激しく、武闘派で知られる。小政の名の由来は、大政と同じ山本政五郎を名乗り、小柄だったのでそう呼ばれた。

森の石松

「食いねえ、食いねえ、すしを食いねえ」広沢虎造の浪花節で知られる森の石松の出生は「東海遊侠伝（第六回）」によれば三河とされる。八名

村（新城市）の洞雲寺に墓がある。万延元年（一八六〇）六月一日没。行年二十八歳の説をとれば、生れは天保四年（一八三三）か。その最後は、子待講の夜、都田の吉兵衛兄弟にだまされ、闇夜の中で斬殺された。浪曲では「文久二年（一八六二）」とされるが、万延元年（一八六〇）が正しい。

森町の大洞院にも墓があり、出生を森町とする昭和十七年十月、次郎長五十回忌の時、梅蔭寺山門前にて。中央ステッキを持つ小笠原長生、その右側が田辺高之助こと田辺幸蔵、左から三人目が鈴木幸太郎。



説もある。森町では三年に一回石松祭りが命日に合わせて行われる。

増川の仙右衛門

梅蔭寺の次郎長墓に隣合わせて、子分の大政、小政、仙右衛門ら三人の墓が並んでいる。仙右衛門は、大政、小政、石松に次ぐ幹部の一人である。

本名宮下仙右衛門、駿河国富士郡増川村（富士市）出身。「東海遊侠伝」（第十回）の遠州菊川の宿場で伊豆の金平、黒駒の勝蔵らとの手打式の場面で登場し、注に（駿州増川の産、佐二郎の子なり）と記されている。仙右衛門の父佐次郎は、伊豆の金平一味竹之助に殺され、仙右衛門は辻の勝五郎の協力によって、文久二年父の仇を討ち、それを契機に次郎長の子分となった。次郎長子分としては、石松や大政、小政にくらべてずっと後期になる。天保七年（一八三六）生れ。明治二十五年、五十七歳で没。明治になってから巴川畔の松井町付近に住み、邸跡の側溝に仙右衛門溝の異称がある。

明治二十六年（一八九三）、次郎長が亡くなった後の一家の跡目は、いったん大政系が継ぎ、三代目から仙右衛門の人脈が継いだ。仙右衛門は次郎長が他界する一年前に亡くなっている。明治二十六年六月十五日、梅蔭寺で行われた次郎長の葬儀委員長は、子分筆頭の当目の岩吉（焼津市当目浜出身、本名久保山岩吉、大正三年没）がつとめた。清水次郎長一家二代目を継いだのは、小澤惣太郎である。「次郎長十七回忌（明治四十二年）」の

法要参列者の写真には中央に未亡人おちようをはさんでおちようの長男入谷清太郎、当目の岩吉が坐っている。(会報14号参照)

二代目を継いだ大政直系の小澤惣太郎は、岩吉から少し離れた前列の右端に近い位置に坐っている。写真にうつっている小澤惣太郎は、明治十四年(一八八一)生れ。二十八歳である。清水、慶雲寺にある墓には、次郎長跡目、俠客小澤惣太郎墓と記されている。没年は大正四年、次郎長一家二代目は三十五歳で亡くなったわけだ。

仙右衛門系が登場するのは、三代目からである。三代目鈴木幸太郎、四代目田辺武一、五代目田辺金吾と続く。

二代目小澤惣太郎が大正四年に亡くなったのに続いて、翌大正五年には次郎長未亡人おちようが八十歳で他界した。子分筆頭で次郎長の葬儀委員長をつとめた当目の岩吉も、その前年、大正三年にこの世を去っている。

おちようの死後、次郎長一家の跡目は空席のまま長い年月が流れた。

大正十二年九月一日、関東大震災が起き、横浜港が潰滅的な被害を受け、その代替港として清水港がクローズアップされた。荷役の支援として神戸の斉藤仙太郎率いる斉藤組がやってくる。

その斉藤組と、次郎長一家二代目、小澤惣太郎の若い衆だった岩崎市蔵が、荷役をめぐる縄張り争いから衝突し、斉藤組の手にかかって岩崎が刺殺されるという衝撃的な事件が起こった。大正十五年七月のことである。



増川の仙右衛門肖像

その年、年号が昭和と変わるが、次郎長一家の跡目は空席のままであった。昭和十七年、次郎長五十回忌という大きな節目を迎えようとしていた。主役は次郎長顕彰会会長小笠原長生海軍中将だが、蔭の主役は次郎長一家の長老格田辺高之助である。この田辺が次郎長一家の跡目として白羽の矢をたてたのが鈴木幸太郎である。田辺高之助は慶応二年生まれ、仙右衛門の流れを汲む岩淵(富士川町)の貸元だ。次郎長五十回忌を機に三代目鈴木幸太郎を指名し、五十回忌の法要をすませた翌月に亡くなった。

幸太郎は田辺高之助の娘を娶り、戦後も清水市会議員などをつとめて活躍する。長身で、近衛文磨と風寛十郎を足して二で割ったような風貌だと評された。

幸太郎亡きあとの四代目は、田辺高之助の孫に当たる田辺武一。天才的な中盆と評されたが、三十歳代でなくなり、五代目はその弟、田辺金吾(大正十五年生れ)が継いだ。彼は平成十九年の現在も健在である。昭和四十一年、清水玉川楼で警察署長など立会いのもとに、清水次郎長一家を解散した。「暴力団などといわれるようでは、次郎長

親分に申訳が立たない」が五代目金吾の持論だ。

辻の勝五郎

「東海遊俠伝」(第十回)、黒駒勝蔵と天竜川をはさんで一大決戦をいどむため、次郎長は子分二十四人を率いて出発する。そのメンバーに勝五郎とあり、注に(辻勝と呼ぶ)と記されている。

本名加藤勝五郎、天保六年(一八三五)生れ、富士市今泉出身。明治四十年没、七十三歳。今泉法雲寺の過去帳によれば、戒名は顯徳院寛剛睿毅居士。ちなみに、呼び名の辻は今泉の中心部に当る四つ辻をいう。次郎長の子分となったのは、仙右衛門の項に記したように、宮下佐次郎の仇敵を討った縁による。

相撲の常

本名岩田常八。愛知県江南市五明の出身。「東海遊俠伝」(第六回)には、嘉永三年(二八五〇)次郎長に助けを求めた八尾ヶ嶽宗七(後のほげたの久六)のために大政らとともに名古屋へ向かう。その注には(力強し、相撲常と称す)とある。次郎長が女房のおちようを同行して安政五年、



富士市大淵にあるお相撲の常の石碑



関東綱五郎肖像

三河へ逃避行をした時も行動を共にした。

墓は愛知県江南市道音寺に明治三十三年建立されている。戒名は體相良玄居士。五明の常八と呼ばれた。伊勢の出身とする説もある。

富士市大淵の次郎長開墾跡地にお相撲の常の石碑が建てられている。

関東の綱五郎

本名鈴木綱五郎。慶応二年、荒神山の決闘で活躍し、吉良の仁吉や法印大五郎などと共に負傷する。しかし死亡は免れ、明治になってからは京都で火薬商などを営んだ。出身は八王子、千人同心の家系で生れた。荒っぽい性格で、「東海遊侠伝」の注釈では、「吉原で遊んだ時、遊女が言うことを聞かなかったので、短銃をぶっ放し、捕方の手を逃れて駿河清水港に来て次郎長の子分となった」とある。

明治十九年没。八王子の鈴木家の墓地に葬られる。戒名は義顕院阿仙道翁居士。享年八十八歳。子孫の多摩病院院長持田治雄発行による『関東綱五郎の生涯』（文庫版八十五頁）がある。著者は大谷竹雄。その一節を以下に紹介しよう。（T）

一八三九年天保十年の五月。

鈴木綱五郎は武州多摩郡高尾山麓の落合で二十才の夏を迎えた。例年より暑さが早くきて、綱五郎は素っ裸で縁に出て夕涼みを取っていた。いや実は夕涼みをよそおって、さつきから、しきりと一つの思いにふけていたのである。

父の惣七も、母（名不詳）も息子の心にどのような変化が起こっているか知らなかった。両親にとつて子どもは何時までも子どもとしか思えなかった。いつの時代でもそうであるらしい。

綱五郎もまた、惣七の知らぬ世界に二十才の若ものの夢をえがいていたのである。

彼の筋骨は既に十分なおとなだった。むしろひとなみはずれて大きくて、たくましかった。よく肥った顔の中に、目も鼻も口も、みな大きく居すわった感じで、見るからに尋常でないツラがまえた。

その風貌のように、彼の心中もそのときある一つの勇猛な企てにおどっていたのだった。彼は家を出る決心をしていたのである。何のために？

それは彼にもはつきりとはつかめなかった。別に学に志してのことではない。武芸を修業して、幕末騒乱の世にひと旗あげようというのでもなかった。

ただ何とはなしにこのままのんびりとして、高尾山麓の旧家のくすんだ家屋の中で息をしいられない気持だった。

何か音を立てて、世の中が自分の周囲で動いているような気がした。

そして自分だけが、死んだような静かな環境の中で眠らされようとしている気がした。それが綱五郎にはたまらなかった。

時代の動きは彼の住む村へもひしひしと伝えられてきた。（『関東綱五郎の生涯』より）

編集室から

● 会報二十号をお届けします。この号では、昨年（平成十八年五月）町おこしを目指し、別動隊として発足した「次郎長で行かざあのかい」のこの一年を総括しました。

● 編集作業がすすんでいる二月下旬、何やら雑音しきりに聞こえてきました。某組が清水一家を名乗るらしいという風評です。三月一日の朝刊では、ついに「六代目清水一家を継承」と報道されました。

● 今から四十一年前、「暴力団と言われるようでは次郎長親分に申訳が立たない」と、清水一家五代目田辺金吾氏は組を解散、組織暴力と決別しています。その五代目が健在というのに六代目が清水一家を名乗るとは。

● 勝手に名乗るのは防ぎようがないということですか。まして山口組と清水一家の縁組など、次郎長が聞いたら目を剥くでしょう。

● どっちにしても、今度の「清水一家」、次郎長とは何の関係がない。このことを、日本中の次郎長ファンに、強く訴えます。（T）